



タイトル Title	オズワルド・ヂ・アンドラーヂ「食人宣言」分析:三つの分類と法概念を中心に
著者 Author(s)	居村, 匠
掲載誌・巻号・ページ Citation	美学芸術学論集,15:52-81
刊行日 Issue date	2019-03
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
JaLCDOI	10.24546/81011253
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81011253

オズワルド・ヂ・アンドラーヂ「食人宣言」分析 ——二つの分類と法概念を中心に

居村匠

Takumi IMURA

はじめに

本論文の目的は、オズワルド・ヂ・アンドラーヂ (Oswald de Andrade, 1890-1954) の代表的著作「食人宣言」(“Manifesto Antropófago”, 1928)¹ を二つの分類によって分析することで、その主張を明らかにし、彼の晩年の著作での問題意識がそこにすでに現れていることを示すことである。同時に、分析により明らかになる主張と関わりながら、宣言における食人のモチーフが身体を喚起するものであることを明らかにする。

アンドラーヂはブラジルの小説家・批評家で、ブラジル・モデルニズモの中心人物のひとりである。サンパウロの非常に裕福な家庭に生まれた彼は、法学の教育を受け、まずジャーナリズムにおいて活動を始める。一九一〇年代の後半からブラジルの文化芸術に関する文章を書きはじめ、一九二二年の近代芸術週間など、その近代化に積極的に参与していった。ブラジル・モデルニズモにおける、西洋に對してブラジル独自の文化を創造しようとする動きの集大成とも言うべきものが食人運動 (movimento antropofágico) である。この文学運動のなかで一九二八年に発表されたアンドラーヂの著作「食人宣言」は、ブラジルの土着性を肯定し称揚する、彼の代表作のひとつである。

アンドラーヂとこの宣言は、エリオ・オイチシカといった後世の芸術家に対してもインスピレーションを与え、一九九八年の第二四回サンパウロ・ビエンナーレにおいて総括されるように²、ブラジルの芸術全体に影響を及ぼすものであった³。その一方で、プリミティヴィズムや男性中心主義、西洋と周縁という関係を固定化するような態度において、彼の思想は現在さまざまな批判を受けている⁴。宣言のこうした要素は批判されてしかるべきものである。しかし、アンドラーヂの晩年（一九四〇年代以降）の著作は「食人宣言」で提起した問題を深化させ、西洋近代による自己批判としてではなく、非西洋圏における西洋の批判的乗り越えとしての人間像の刷新という達成をなしており、いまだ彼の思想の射程について十分な研究がおこなわれているとは言えないと私は考えている。

本論文は、将来的にアンドラーヂの思想全体の研究をおこなうことを見据えながら、まず「食人宣言」の記述を詳細に分析することで、アンドラーヂの主張の内実とそこで食人というモチーフが果たす役割を明らかにする⁵。そうすることで、晩年の著作における問題系がすでに宣言に現れていることを示し、彼の著作の主要な論点を跡づける。さらに、こうした諸論点の根本に「法」概念があり、食人の思想においてこの概念が重要であることも明らかにする。まず、「食人宣言」の概要と先行研究による批判に触れ、本論文で扱う問題を提起する。つづいて、宣言の主張をそのひとつ目の断章をもとに、反カトリック、反植民地主義、反論理の三つに分類し、内容ごとにいくつかの断章を取りあげ分析をおこなうことで、宣言に織り込まれている複雑な内部構造を明確化する。最後に、宣言における食人のモチーフと法概念の重要性およびその働きを明らかにする。

1 問題提起

「食人宣言」は、ポルトガル語で書かれた断章形式の作品で、一九二八年にブラジル・サンパウロで創刊された「食人運動」の運動誌『食人雑誌』(Revista de Antropofagia)の第一号に掲載された。この雑誌は、アンドラーヂとその同人たちによって一九二八年三月から一九二九年八月まで、全部で二六号刊行された。雑誌の刊行形態はふたつの時期に分けられる。毎号八ページの独立した冊子になっていた一〇号までの第一期と、新聞(Diário de S. Paulo)のある面に掲載され「永久歯」(segunda dentição)と呼ばれたそれ以降の第二期である。この『食人雑誌』は、直接にはダダイストのフランシス・ピカビアが一九二〇年にフランスで発行した雑誌『食人種』(Cannibale)に着想を得ている。これに限らず、一九二〇年代のヨーロッパ文学には食人(cannibalismo)の主題が存在していた⁶。

雑誌掲載時、「食人宣言」は三ページ目と七ページ目に分割されていた。三ページ目では全面が宣言にあてられており、七ページ目では誌面の三分の二で宣言が終わり、残りは別のテキストである。棒線によって区切られた宣言の五二の節は、首尾一貫した文章を構成するというよりも、ゆるやかに連関した断章となっている⁷。

宣言を一読すると、次のような記述が目に入る。断章(1)、(5)を参照する⁸。

食人だけが私たちをひとつにする。社会的に。経済的に。哲学的に。

SÓ A ANTROPOFAGIA NOS UNE. Socialmente. Economicamente. Filosoficamente. (“Manifesto Antropófago”, p. 67. 1)⁶

私はわたしでないものにのみ興味をもつ。人間の法。食人者の法。

Só me interessa o que não é meu. Lei do homem. Lei do antropófago. (“Manifesto Antropófago”, p. 67. 5)

ここから導かれるもっとも基本的な読解として、この宣言は「西洋の文化を消化・吸収すること、独自のブラジル文化・芸術の構築を目指すもの」だと言うことができる。しかし、ラテンアメリカ研究者であるカルロス・ハウレギが指摘するように、宣言のなかで文化構築について言及している部分は決して多くはない。マニフェストではあるものの、「食人宣言」の大部分は、ブラジルの歴史と現状に対する批判的な記述や、未開社会に対するユートピア的な描写にささげられている¹⁰。宣言全体を見れば、食人あるいはそれに類する表現も少数にとどまっている。食人 (antropofagia)、食人者 (antropófago) などの語が現れるのは全部で一四回、五二の断章のうち一〇に過ぎない。

ラテンアメリカ文学研究者であり、「食人宣言」の英訳もおこなっているレスリー・バリーは、宣言における「食人」について、その積極的な意義をほとんど認めていない。バリーは、アンドラーヂ自身が植民地主義の遺産に大いに負っており、この宣言がブラジルとその文化の周縁性をフェティッシュと

化していることを指摘している¹¹。つまり、宣言は、植民者と非植民者、中心と周縁の関係を批判こそすれ、それを乗り越えられていない。ブラジルの西洋に対する劣位を美学的な優位へとスライドさせる「発展途上の美学化」(esthetization of underdevelopment)をおこなうことによって、彼と彼の宣言は、かえってこうした周縁性を固定化しているのである。周縁性と他者性をめぐってこのように「食人宣言」に批判を加えるバリーにとって、「食人」もまた土着性によって西洋との差異を導く記号でしかない。「(差異を導くために食人をもちいる言説の)野蠻なもの、現実的というよりむしろ観念的であるような「土着の」価値に力を与え、混交性をフェティッシュとするよう機能する」¹²。

アンドラーヂらのいう「食人」が実際に人肉を食べる行為ではない以上、宣言の食人が象徴的、観念的、記号的であることは間違いない。しかし象徴的であることはそれが実際的な作用をもたないことを意味しない。以下の分析を通じて、私は宣言とその食人のモチーフが具体性、身体性を喚起するものでもあることを明らかにする。

2 「食人宣言」における三つの分類

ここからは、「食人宣言」のなかで直接には食人について述べていない断章を三つに分類し、その内容を精査することで、アンドラーヂの主張の構造を明らかにする¹³。さきに引用した断章(1)では、「食人」は社会、経済、哲学という三つの側面から、人々を一体にするものであるとされている。そこで本論文は、大まかにこの三つにそれぞれ対応するものとして、反カトリック、反植民地主義、反論理とい

う三つの分類を仮設的に設定する。頻出する「に反対して」(contra)という表現からも一見して分かるように、宣言はブラジルの歴史と現状を告発する側面をもっている。

2-1 反カトリック

ひとつ目の分類は反カトリックである。「食人宣言」において、アンドラーヂはブラジルに入植、布教のためにやってきた宣教師たちとそのカトリシズムの教義に対して、批判をおこなっている。まず、教化 (catequese) に反対する、¹⁴ というかたちでそのことが述べられている断章 (4) を引用する。

あらゆる教化に反対して。そして、グラックスの母に反対して。

Contra todas as catequese. E contra a mãe dos Gracos. ("Manifesto Antropófago", p. 67. 4)

アンドラーヂのカトリック批判は、カトリシズムと結びついた規範的な道德観の批判と一体である。グラックスの母とは、古代ローマの女性、コルネリア・スキピオニス・アフリカナのことで、彼女はカルタゴとの戦争でローマを勝利に導いたいわゆる大スキピオの娘であり、ローマの政治改革をおこなったグラックス兄弟の母である。年の離れた夫に先立たれたのち、四人の子どもを育て上げたコルネリアは、一八世紀サロン絵画において家庭を守る良妻賢母として画題に取りあげられていた¹⁴。ここでのグラックスの母コルネリアは、西洋の家族や家にまつわる道德規範を象徴する人物として、告発の俎上にあ

げられている。アンドラーヂはカトリシズムとともに、家父長的な道德観の流入をも批判する。

ただし、宣言の反カトリックの態度は、そのすべてを破棄するわけではない。アンドラーヂによるカトリシズムの読み替えの試みとして、断章(13)を引用する。

私たちはけして教化されなかった。でたらめな法権利をつうじて生きている。私たちはバイーアにキリストを生む。あるいはパラのベレンに。

Nunca fomos catequizados. Vivemos através de um direito sonâmbulo. Fizemos Cristo nascer na Bahia. Ou em Belém do Pará. (“Manifesto Antropófago”, p. 69. 13)

断章(13)では、アンドラーヂは「私たち」がこれまでキリスト教によって教化されてこなかったと述べる。動詞の一人称複数形(*fomos, vivemos, fizemos*)によって示されるこの主体は、ブラジル人全体のことであろう。ブラジルという国自体がキリスト教の布教から始まったことを考えればこれは事実に戻すように思われるが、ここで彼が述べているのは、ブラジル人が教会の法ではなく「でたらめな法権利」(*um direito sonâmbulo*)にしたがって生きているということである。「でたらめな」という語は夢遊状態をも意味し、とくにカトリシズムの規範と対立するだけでなく、後述する西洋的な視点からの反論理性とも関わっている。また、ここで法(*lei*)ではなく法権利(*direito*)という語が用いられることから、ふたつ前の断章にあるフランス革命や人権宣言を想起させる。つまり、近代的な人権(*direitos*

do hominem)とは別の権利、社会、人間のあり様が想定されていると言うことができる。この西洋的な視点からのでたらめさ¹¹反論理については後述する。重要なのは、そのあとにアンドラーヂがブラジルの地にキリストを生むと記している点である。

バイーアとはブラジル・バイーア州の州都サルヴァドールのことであり、ブラジル初のカトリック司教座が置かれ、ブラジル・カトリックの中心地となった場所である。ベレンとは同・パラ州の州都であり、この名はキリスト生誕の地であるベツレヘムを意味している。つまり、西洋から移入したキリスト教とそれと結びついた道徳を否定しながら、アンドラーヂはブラジルの地に自分たち自身の聖人を創りだすことを宣言している。この点で、彼はカトリシズムを否定するだけでなくそれを読み替えることで、宗教的なものの再編を試みている。この問題系は、宗教的な超越性の拒否、食人儀礼の組織というかたちで、彼の晩年の著作まで展開されている¹⁵。

2-2 反植民地主義

ふたつ目の分類は反植民地主義である。いわゆる「新大陸」発見からの入植・開拓は、原住民へのキリスト教の布教と密接に結びついているため、カトリシズムと植民地主義への抵抗は明確に分けられるものではない。ここで、まずはポルトガルによる植民の歴史が問題とされる。

太陽の子どもたち、生命の母。サウダーヂの欺瞞のすべてによって、発見され、猛烈に愛された。

入植者たちに、商人たちに、旅行者 (touristes) たちに。巨大な蛇の国で。

Filhos do sol, mãe dos viventes. Encontrados e amados ferozmente, com toda a hipocrisia da saudade, pelos imigrantes, pelos traficados e pelos touristes. No país da cobra grande. (“Manifesto Antropófila-go”, p. 68. 8)

上に引用した断章 (8) は、ブラジルとその人々が海を渡ってやってきた入植者、商人、旅行者によって「愛された」と記す一方で、それが「サウダーヂの欺瞞」(a hipocrisia da saudade) であるとも述べている。サウダーヂとは、ポルトガル語で郷愁、切望などの複合的な意味をもつ語であり、「ポルトガルの国民性と伝統的に結びつけられてきた心情」である¹⁶。アンドラーヂは、かつての宗主国由来の情緒というものを否定し、入植者たちのブラジルへの愛がその植民地化の欲望と一体であることを喝破する。

単なる政治体制としての植民地主義だけでなく、西洋の価値観の移植をも批判するアンドラーヂにとって、ブラジルはいまだ西洋の支配から脱していない。断章 (51) では精神的な独立の必要性が説かれている。

私たちの独立は、いまだ宣言されていない。ジョアン6世の典型的な文句——「私の息子よ、あなたの頭上に王冠を置こう、冒険家たちがそうする前に！」私たちは王家を追放した。ブラガン

サの魂を、法令集を、マリア・ダ・フォンテの嗅ぎたばこを追放しなければならない。

A nossa independência ainda não foi proclamada. Frase típica de D. João VI: — Meu filho, põe esse coroa na tua cabeça, antes que algum aventureiro o faça! Expulsamos a dinastia. É preciso expulsar o espírito bragançino, as ordenações e o rapé de Maria da Fonte. (“Manifesto Antropófago”, p. 74. 51)

ジョアン6世は、一八〇七年ナポレオンによる侵攻を避けリオ・デ・ジャネイロに遷都したポルトガル国王で、その息子とはジョアン6世のリスボン帰還後、ブラジルの統治を摂政としてまかされたペドロ王子のことである。一八二二年王子がドン・ペドロ1世として独立を宣言することでブラジル独立が果たされ、一八八九年までつづくブラジル帝国が始まる。このブラジル帝国も後には革命によって打倒され共和制へと移行する、つまり王家は追放されるが、アンドラーヂにとっては、その魂や法令集といった社会制度とそこから醸成される意識の面での独立ははまだ十分ではなく、さらに徹底されるべきなのである。¹⁷

したがって、アンドラーヂは革命の必要性を訴える。

私たちはクライバ革命を望んでいる。フランス革命よりも偉大な。人間の規範において有効なあらゆる反乱の統一。私たちがなしでは、ヨーロッパは乏しい人権宣言さえもたなかっただろう。／アメリカによって予告された黄金時代。黄金時代。そしてすべての少女たち (girls)。

Queremos a revolução Caraíba. Maior que a Revolução Francesa. A unificação de todas as revoltas eficazes na direção do homem. Sem nós a Europa não teria sequer a sua pobre declaração dos direitos do homem. / A idade de ouro anunciada pela América. A idade de ouro. E todas as girls. (“Manifesto Antropófago”, p. 68. 11)

この、アメリカ・インディオの部族であり、人食い (cannibal) という語の語源でもある名を冠した革命は、既存の社会秩序の全体を打ち倒すためのものである。この語がフランス革命と対比されるかたちで用いられていることに注目するならば、彼がカライバを自分たちの同一化の対象となるようなものともみなしていたとすることができると言える。アンドラーヂは、フランス革命、人権宣言でさえ、植民地の犠牲なくしては成り立たなかったとみなしており、この革命はそうした不平等を是正するという点で、「フランス革命よりも偉大」である。

だが、ここでもアンドラーヂは単なる原始社会への回帰を訴えるわけではない。つづく断章(12)において、彼は自分たちを「技術的な野蛮人」(o bárbaro tecnizado)だと規定している¹⁸。これはドイツの哲学者ヘルマン・カイヤリンクの用語を流用したもので、アンドラーヂは「原始的な人間が近代化の成果を享受する」ユートピアを夢想している¹⁹。近代化の成果としての技術とは機械技術のことである。断章(30)では彼の機械への期待が述べられる。

目録と遠隔視テレビジョンの装置による進歩の固定。ただ機械装置だけが。そして血液の注入器が。

A fixação do progresso por meio de catálogos e aparelhos de televisão. Só a maquinaria. E os transfusores de sangue. (“Manifesto Antropófago”, p. 71. 30)

まず、目録と遠隔視の装置によって、ブラジルの進歩は止められている。つづく「ただ機械装置だけが」(so a maquinaria) という一文は、その述語が明示されていないものの、この文化の停滞を打破すると予想される。最後の「血液の注入器」にはふたつの点を指摘することができる。ひとつは、停滞の打破が輸血のように、外部からの文化の取り込みによってなされるという点。それも、ただ他の文化を学んだり模倣したりするのではなく、それを体内に注入するようなより深い吸収・同化が必要とされている。もうひとつは、「輸血」(transfusão de sangue)ではなく「注入器」(os transfusores)という表現から、吸収・同化のための機械装置の重要性が示唆されている点。つまり、アンドラーヂにとって停滞の打破は、機械技術による他の文化の取り込みによっておこなわれる。機械装置、技術への解放の期待は晩年の著作まで一貫して指摘することができる。²⁰

2-3 反論理

最後の分類は反論理である。ここでは西洋的な合理性にもとづく論理、理性が批判の対象となっている。アンドラーヂにとって、ブラジルには「論理が生まれること」²¹はなく、人々は「神託の世界にの

み注意を払いうる」²²。断章(10)では、先ほどの反植民地主義に引き続いて、既成の社会秩序や道徳観の「輸入」が批判されている。

缶詰めされた意識のあらゆる輸入者に反対して。生の触知可能な実在。そしてレヴィ＝ブリュール氏が研究するところの前論理的心性。

Contra todos os importadores de consciência enlatada. A existência palpável da vida. E a mentalidade pré-lógica para o Sr. Levy Bruhl estudar. (“Manifesto Antropófago”, p. 68. 10)

ただし、批判の対象となっているのは輸入それ自体ではなく、その「輸入者」(os importadores)であり、これは西洋人やブラジルにおける模倣者たちであろう。アンドラーヂの知的活動が西洋文明に大いに依拠していることを思えば、ここで彼は西洋の知の遺産を取り入れながら、西洋の論理に対して別の知性のあり方を構想していると言える。それが「生の触知可能な実在」(a existência palpável da vida)である。「触知可能な」という単語は、明白な、はっきりしたという意味をもつが、同時に触覚的に認知できるという意味合いをもつ。身体的に接触可能な生の実在性こそが、アンドラーヂが西洋の理性に対置するものである。また、「前論理的心性」(a mentalidade pré-lógica, la mentalité prélogique)もまた、彼が自分たちのものとして評価するものである。これはフランスの人類学者リュシアン・レヴィ＝ブリュールの用語で、未開社会の人間の心性を表している。レヴィ＝ブリュールは『未開社会の思惟』のなかで、

西洋の文明社会と未開社会とが異なる思考様式をもつと指摘し、西洋近代的な無矛盾な論理に縛られない未開人の思考を「前論理的心性」と呼ぶ²³。すでに述べているように、アンドラーヂはこうした未開社会の人間のあり方をそのまま復古することを目指したのではないが、こうした古代史や原始社会の研究から大いに刺激を受けている。晩年においても彼は、モーガン、バツハオーフェン、エンゲルスらの古代史研究を参照し、西洋の父権制社会の次に訪れる新しい母権制社会を構想している²⁴。身体の実在性を重視するアンドラーヂは、断章(46)では「具体主義者」(concretista)を名乗る²⁵。

私たちは具体主義者である。思想は奪い、反発し、公共広場の人々を駄目にする。私たちは思想ともう一方の停滞を棄却しよう。旅行記によって。しるしを信じる、道具と星々を信じる。

Somos concretistas. As ideias tomam conta, reagem, queimam gente nas praças públicas. Suprimamos as ideias e as outras paralisas. Pelos roteiros. Acreditar nos sinais, acreditar nos instrumentos e nas estrelas. (“Manifesto Antropófago”, p. 73. 46)

具体主義に対置され、否定的に描写されるのが「思想」(as ideias)である。具体主義もまた「思想」には違いないが、理念的、脱身体的な西洋の思想と、具体的、身体的なブラジルの思想の対立をアンドラーヂは問題にしていると考えるべきである。したがって具体主義者たる彼は、理念的な思想と思想なしの停滞(進歩の固定)との両方を退け、別の思想を打ち立てるのである。それは「道具」(os instru-

mentos)と「星々」(as estrelas)とを信じるとあるように²⁶、「土地との交感において」能動的かつ有機的に自然と関わるものである(断章23)²⁷。ここには前述したアンドラーヂにおける機械技術の問題系を指摘することもできる。

アンドラーヂのいう具体主義のあり方を象徴するのが、「食人宣言」が最初に発表された際に挿絵として添えられていた、画家タルシラ・ド・アマラルによるドローイング《アバポル》(Abaporu, 1928)である。食人の思想について、アンドラーヂとアマラルは相互に影響を与えあい、「食人宣言」に先立ってこの作品が制作されている。タイトルの「アバポル」は、南米インディオ・トゥピナ族の言葉で「食べる人」を意味している。この作品は先行する同名の絵画作品をもとに制作されたものであり、両者の画面構成は基本的に相違ない。画面には、大地にすわる裸の人間、頭上の太陽、サボテンが描かれており、太陽を中心に線対称に構成されている。大地に向けられた人物の右手右足は大きく、人物の頭と頬杖をつくような左手は極端に小さく描かれている。米国のキュレーター、ステファニー・ダレッツサンドロは《アバポル》の先行作品として、アマラウの《黒人女》(A Negra, 1923)をあげ、その源泉のひとつとしてセザンヌらの水浴図における「高貴な野蛮人」の表象を指摘している²⁸。「食人宣言」における反論理とは、インディオの原始社会を透かし見つつ、西洋とは異なるかたちで身体を賦活し、機械技術によって自然とかわる思想である。《アバポル》は身体性と理念性の両立として、そのことを象徴的に表現している。

ここまで反カトリック、反植民地主義、反論理という三つの分類のもと、「食人宣言」における主張

を詳しく見てきた。それぞれの分類は、西洋由来の道德観、社会形態、論理を拒否するものだった。そこから、アンドラーヂが宗教的なものの再編、機械技術による解放、身体思想を構想していることも示した。

3 食人の思想と法

最後に、宣言の食人のモチーフがこうした主張のなかでどのような役割を果たしているのかを明らかにする。まず、食人のモチーフはアンドラーヂの身体性の重視と一致している。断章(16)を参照すると、彼が身体性を要請するにあたり食人を導入していることが分かる。

魂は身体なき魂を分かつとしない。擬人化。食人ワクチンの必要性。子午線の諸宗教との均衡のために。そして、外部の異端審問所との。

O espírito recusa-se a conceber o espírito sem o corpo. O antropomorfismo. Necessidade da vacina antropofágica. Para o equilíbrio contra as religiões de meridiano. E as inquisições exteriores. (“Mani-festo Antropófago”, p. 69. 16)

ここで述べられているのは、他者理解のための身体の必要性とその処方としての食人である。「魂」(espírito)が他者を(あるいは自己を)理解するのは身体を通じてである。そして、食人こそ物理的、

身体的な接触（食べること）を通じて、食べる者・食べられる者の身体の実在を強く意識させる行為である。アンドラーヂは食人の思想というワクチンを導入することで、この人間相互の関係における身体の次元へと目を向ける。すでに述べたように、人々の連帯や交流をつなぐものとしての食人は、食人儀礼というかたちで晩年の彼の宗教への考察にまで引き継がれている。また、ワクチンとは弱毒化された抗原を取り込むことで免疫をつけるものなので、「食人的なワクチン」(a vacina antropofágica)とは「敵」を取り込むことで免疫をつけ、それを乗り越えるためのものである。すでに見てきたように、アンドラーヂが乗り越えるべき「敵」とみなしているのは、西洋文明である。

つづいて、宣言のなかでもっとも長い断章(49)を参照し、食人というモチーフの機能を分析する。この断章では「肉体の食人」(a antropofagia carnal)と「卑しい食人」(a baixa antropofagia)とが対比させられる。少し長くなるが、全文を引用する。

神と呼ばれようものとその被造物とのあいだの——人間とそのタブーとの永続的な矛盾によって説明される——戦い。日々の愛情と資本主義の生活法。食人。聖なる敵の吸収。それをトーテムへと変化させるために。人間固有の冒険。世俗の目的。しかしながら、純粹なエリートだけが、肉体の食人を実現することができる。これは、それ自体で生の最も高度な感覚をもたらし、フロイトが同定したあらゆる悪、カテキズムの悪を免れる。そこから生じるのは、性本能の昇華ではない。それは、食人の本能にとっての温度計の目盛りである。肉体から、それはものごとを選ぶ

ようになり、友愛をつくりだす。感情的であれば、愛を。理論的であれば、科学を。離れて、移動する。私たちは墮落する。カテキズムにおける罪——嫉妬、高利貸し、虚言、殺人——を寄せ集めた、卑しい食人。いわゆる文明化し、改宗した群衆による害悪、それは私たちがおこなっていることと対立している。食人者たち。

A luta entre o que se chamaria Incrariado e a Criatura – ilustrada pela contradição permanente do homem e o seu Tabu. O amor cotidiano e o modus vivendi capitalista. Antropofagia. Absorção do inimigo sacro. Para transformá-lo em totem. A humana aventura. A terrena finalidade. Porém, só as puras elites conseguiram realizar a antropofagia carnal, que traz em si o mais alto sentido da vida e evita todos os males identificados por Freud, males catequistas. O que se dá não é uma sublimação do instinto sexual. É a escala termométrica do instinto antropofágico. De carnal, ele se torna eletivo e cria a amizade. Afetivo, o amor. Especulativo, a ciência. Desvia-se e transfere-se. Chegamos ao aviltamento. A baixa antropofagia aglomerada nos pecados de catecismo – a inveja, a usura, a calúnia, o assassinato. Peste dos chamados povos cultos e cristianizados, é contra ela que estamos agindo. Antropófagos. (“Manifesto Antropófago”, pp. 73-74. 49)

まず、三つの組を指摘することができ。神—人間、人間—タブー、聖なる敵—トーテムである。前ふたつの組が対立する関係であるのに対して、聖なる敵のトーテムへの変形は移行する関係である。聖な

る敵がタブーの対象となるトーテム動物のことだとすれば、これは前者の対立を後者が解決ないし止揚する事態を表していると考えられる。タブーをトーテムへと変形させるという主張は、宣言のなかで三度あらわれる。当然、これはフロイト『トーテムとタブー』でのトーテム信仰の発生についての議論を下敷きとしている。アンドラーヂはこうした食人の原理を「世俗の目的」(a terrena finalidade)と述べており、現行の社会においても有効なものだと考えている。

それに対して、アンドラーヂはより上位の食人、「肉体の食人」(a antropofagia carnal) をエリートにのみ可能なものとして打ち立てる。この食人は、「嫉妬、高利貸し、虚言、殺人」といった罪に陥ることなく、「生の最も高度な感覚」(o mais alto sentido da vida) をもたらすという。ここまでの分析から、この感覚は、カトリシズム、西洋文明の移入によって失われた生のあり様、自然と自身の身体とがより直接に関係する感覚であると言える。では「食人」が殺人をはじめとする様々な悪を免れるのはなぜか。アンドラーヂは詳らかに語るわけではないが、それはこうした悪が西洋のキリスト教にもとづく文化の中で規定される悪であり、彼はそうした既存の社会規範や秩序を刷新することを目指しているからだと考えられる。つまり、彼の構想する「新しい母権制」にあつては、現在考えられるようなかたちでの禁止は存在せず、したがって罪もまたない。肉体の食人は、新しい社会の出現と軌を一にしている。それに対して、文明化し、改宗した群衆は「卑しい食人」(a baixa antropofagia) をおこなうものとされる。ここで、アンドラーヂが自らを大衆と区別して、自身を高みに置いていると批判するのは早計である。²⁹なぜなら、「私たちは墮落する」や卑しい食人が「私たちがおこなっていることと対立している」とい

う表現からは、ふたつの食人の区別が確固たるものではなく、アンドラーヂ自身も現在進行系で「肉体の食人」の実現を目指していると考えられるからである。また、「純粋なエリート」は西洋的な知識人や支配階級のことではない。これまで見てきたように、アンドラーヂはそうした西洋的な権威を解体し、ブラジル独自の生のあり方の実現を目指していた。断章(49)に示されるのはエリートイズムというよりも、彼の前衛性の発露であると考えるべきである。

これまで、「食人宣言」における食人のモチーフについて、象徴的な記号に過ぎないという批判に対して、それが喚起する身体性を明らかにしてきた。では、こうして宣言において表される身体は、西洋の規範や道徳から解放された自由な身体だろうか。そうではない。「食人宣言」は西洋由来の「法」を拒否し、新たに「食人者の法」を打ち立てる。法は禁止を課すことで身体を別様に縛る。このことはアンドラーヂのいう食人がどのようにして可能となるのかという問題とも関わっている。本論文の最後に、アンドラーヂにおける法(Lei)の概念がその思想全体の基礎をなし、食人を可能とするものであることを指摘したい。

まず法の概念は、芸術における様式≡規範(ordem)の問題として現れる。アンドラーヂが古い美学に対して新しい美学を提起する一九二四年の「パウ・ブラジル詩宣言」(“Manifesto da Poesia Pau Brasil”, 1924)を引用する。

新しい遠近法(視点) .. / その別のもの、パオロ・ウツチェロの遠近法は最高度の自然主義を生

みだした。それは視覚的なイリュージョンだった。「その遠近法では」遠くの物体は薄れていかない。それは見かけの規範だった。しかし、瞬間は見かけに対する抵抗から生じる。模倣への抵抗。視覚的で自然主義的な視点を別の秩序の視点に取り替える。感覚的な、知的な、皮肉な、純真な秩序の。

Uma nova perspectiva: / A outro, a de Paolo Ucello, criou o naturalismo de apogeu. Era uma ilusão óptica. Os objetos distantes não diminuiram. Era uma lei de aparência. Ora, o momento é de reação à aparência. Reação à cópia. Substituir a perspectiva visual e naturalista por uma perspectiva de outra ordem: sentimental, intelectual, irônica, ingênua. (“Manifesto da Poesia Pau Brasil”, 1924, pp. 63-64.)

この文章は「遠近法」について、古い規範とアンドラーヂが提起する新しい規範が、「しかし」(ora)の前後で対比的に記述されている。パオロ・ウッチェロはルネサンス期イタリアの画家で近代的な遠近法を確立した人物である。ここではウッチェロの遠近法が「自然主義」であり、「視覚的なイリュージョン」だとされている。それは三次元の空間をいかに二次元の絵画平面上に再現するかという問題へのひとつの解答である。このいわゆる線遠近法では、例えば空気遠近法とは異なり、物体の遠近はパース上の相対的な位置によって描写、説明、理解される。「遠くの物体は薄れていかない」とはそのことを意味している。アンドラーヂによれば、これは「見かけの規範」(uma lei de aparência)である。つまり、

現実空間の自然な再現を目的とすることは、絵画面上に現実空間と齟齬のない見かけ上の空間を作り出すことに他ならない。これに対して、アンドラーヂが新しい美学として提唱するのは瞬間性である。遠近法が視点と空間の固定であるのに対して、瞬間はそうした見かけや見かけを模倣することと対立する。当然ながら、ここには写真術の発明や視覚に関する生理学の発展など、人間の自然な視野に対する理解の変化がある。このようなより近代的な意味での視覚に忠実な表現は、印象派などすでに多数の先例がありそれ自体は新しいものではないが、ともあれ、アンドラーヂは自然主義的な視点⇨遠近法を別の秩序に取り替えると言う。

注目したいのは、ここでの「規範」(uma lei)は「法」も意味するということである。アンドラーヂがここで直接問題にしているのは古い美学に対する新しい美学(パウ・ブラジル詩)の構想である。それは「純粹感覚」(o sentido puro)への回帰やいわゆるメデイウム・スペシフィシティーの自覚という「別の様式」(outra ordem)として表明されている。そして、規範や様式を制作に禁止や制限を課すものと考えれば、そこにはアンドラーヂの思想が法に関わるものであるということの先触れを見ることが出来る。法は禁止に関わるものだからであり、それは直接、身体の状態に作用する。

「食人宣言」でも、ふたたび法の問題があらわれている。

世界の唯一の法。あらゆる個人主義の、あらゆる集産主義の隠された表現。あらゆる宗教の。あらゆる平和条約の。

Única lei do mundo. Expressão mascarada de todos os individualismos, de todos os coletivismos. De todas as religiões. De todos os tratados de paz. (“Manifesto Antropófago”, p. 67. 2)

断章(2)では、直前の「食人だけが私たちをひとつにする」というテーゼを受けて、それが世界の「唯一の法」(única lei)であると述べる。アンドラーヂの考えでは集産主義は古代の母権制と、個人主義はそれ以降の西洋文明と対応しているため³⁰、ここでの食人の法は、古代から現代に至るまで「唯一のもの」である。だが、「隠された表現」(expressão mascarada)という言い方からは、この法が唯一のものであることは自明の事実というよりも、思考の条件とみなすべきだと考えられる。それは西洋の父権制を乗り越え、新しい母権制、別様の社会を思考するための条件である。つまり、食人の法を「与えられた」とすることで、次の社会形態が可能となるのである。それは西洋文明由来の身体とは異なる、新しい身体⇨人間のあり方がもたらされることである。食人の法は食人者の身体を準備する。

こうして〈食人の思想〉における法概念の重要性を認めることができる。アンドラーヂが法の議論を十分に展開するのは、一九四〇年代以降の晩年になってからである。晩年の彼の思想において法⇨規範がその主要な論点となることは、一九二〇年以後、彼のなかで芸術の問題が後景化することを説明する。「食人」を核とした文化芸術の様式⇨規範の問題は、食人の法の問題へと展開していくのである。ひるがえって、このことは彼の晩年の著作における法の問題の分析を通じて、その芸術観についても考えられることを意味している。

おわりに

本論文は、オズワルド・ヂ・アンドラーヂ「食人宣言」を反カトリック、反植民地主義、反論理という三つの分類から分析することで、その主張を明らかにしてきた。同時に、彼の晩年の著作での問題意識が宣言にすでに現れていることを示した。それは宗教的なものの再編、機械技術への期待、身体性の重視である。次いで、アンドラーヂがより直接に「食人」について述べている箇所を取りあげ、分析をおこなうことで食人のモチーフが身体性の喚起と関わることを示した。最後に、西洋由来の規範の拒否とともに「食人宣言」が食人者の法を提起することで、新たな身体の布置を生み出していることを確認し、アンドラーヂの思想全体における「法」概念の重要性を明らかにした。

さらに、法の概念に注目した分析をおこなうことで、アンドラーヂ研究において次のような展望が開けることが期待される。まず、本論文で言及した三つの論点が、この概念のもとに捉えなおされる。機械については、自動的に作動する、その自動性、非人称性が認められる。宗教については、非超越的かつ非人間的な作用、ドグマが。身体については、その統御、統治において法概念が関わる。さらに、それはアンドラーヂの全体的な歴史観とも関わるものである。彼は基本的にヘーゲルⅡマルクスの弁証法的歴史観を抱いており、とりわけ後期の著作で明らかかなように、古代の母権制社会、西洋的な父権制社会を経て、来るべき新たな母権制社会の到来を構想している。このきたる社会の到来を保証するものこそ、食人者の法であった。しかし、法の概念はアンドラーヂの進歩主義的な歴史観に侵入してくる非歴史的な異物ともなりうる。なぜなら、法はきわめて近代的な概念であるとともに、無歴史的なもので

もあるからである。このように、法の概念に注目してアンドラーヂの思想を捉えなおすことは、彼の主要な問題に新たな光をあてるとともに、モダニストたるアンドラーヂ像を刷新し、その思想の本当の源泉を明らかにすることに通ずるものである。

註

1 『食人雑誌』に掲載時、タイトルにアクセントはついていなかった。先行研究においては通例、辞書通りの綴りで表記される。

2 Lisette Lagnado and Pablo Lafuente (eds.) (2015), *Cultural Anthropophagy: The 24th Bienal de São Paulo*, London, Afterall.

3 日本における関連する展覧会として、次のふたつをあげることができる。『ネオ・トロピカリア：ブラジルの創造力』（京都現代美術館、広島市現代美術館、二〇〇八年）、『ブラジル：ボディ・ノスタルジア』（東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、二〇一四年）。前者はオイチシカの再解釈と継承を目的としており、後者は「身体」と「郷愁」をテーマにタルシラ・ド・アマラウ含むブラジルの近現代の美術家たちを紹介している。本論文は「身体」への注目という点でこれらの展覧会と軌を一にするが、ブラジル美術史のなかに通時的な共通性を見出していくのではなく、アンドラーヂの同時代的な知のつながりとその独創性を救いだしたいと考えている。

4 Leslie Bary, "The Tropical Modernist as Literary Cannibal: Cultural Identity in Oswald de Andrade", *Chasqui*, vol. 20, no. 2, 1991, p. 15.

5 「食人宣言」の分析は、近年では次の著作でもおこなわれている。都留ドゥヴォー恵美里『日系ブラジル人芸術と「食

人」の思想』三元社、二〇一七年。都留ドウヴォーは、日系ブラジル人芸術家のブラジル文化への同化、あるいは両者の混交を説明するにあたり、「食人宣言」を参照し、分析をおこなっている。これに対して、本論文は文化構築ないし異文化混交の思想としてではなく、近代性の一形態として食人の思想を考えている。

9 Benedito Nunes, *Oswald Caribal*, São Paulo, Editora Perspectiva, 1979, p. 14.

7 論述の便のため棒線で区切られた各節を断章と呼び、ひとつ目の断章を参照する際は「断章(1)」と表記するように、参照する箇所を数字で指示する。

8 「食人宣言」からの引用は全集を用い、ページ数のあとに断章番号を付けて表記する。以下、邦訳はすべて筆者による。

9 ブラジル文学研究者ペアトリス・アゼヴェードは、「食人宣言」は『共産党宣言』(*Manifest der Kommunistischen Partei*, 1848)への応答となっていると指摘している。彼女によれば、『共産党宣言』の最後の一文「万国のプロレタリアーとよ」団結せよ」(Proletarier aller Länder vereinigt euch!)を受け、同じ単語(vereinigen, unir)が用いられること、一方の終わりが他方の始まりとなるような循環として読むことができる。Beatriz Azevedo, *Antropofagia: Palimpsesto Selvagem*, São Paulo, Cosac Naify, 2016, p. 104.

10 Carlos Jáuregui (2012), “Anthropophagy”. p. 25.

11 Bary (1991), p. 13.

12 *Ibid.*, p. 15.

13 以下でおこなう逐語的な分析が宣言の詩的な部分を見逃す恐れはある。本論文はアンドラーヂの言説から彼の理論を抽出する試みであり、方法上の限界としてこのことを認めておく。

14 例えばジョセフ・ブノワ・シュヴァによる《コルネリア、グラックスの母》(*Cornelia, Mother of the Gracchi*, 1795)。

15 Oswald de Andrade, “Um Aspecto Antropofágico da Cultura Brasileira: O Homem Cordial”, 1940-1950; “Do Órfico e

Mais Cogitações”, 1954.

16 Andrade (1991), p. 44. バリーによる英訳の訳注を参照。

17 マリア・ダ・フォンテは、一八四六年のポルトガルの民衆反乱の中心人物。反乱は、インフラ整備のための課税に反対する保守民衆によるもので、国外に富を求めるためにポルトガルの植民地政策を加速させる結果となった。宣言では、コルネリアと同様「伝統に忠実で愛国的な女性の象徴」として批判されている。Andrade (1991), p. 47. バリーによる英訳の訳注を参照。

18 「連関。ブラジルのカライブ族との接触。ヴ、イルゲニ、ヨンが上陸したところ。(Où Villeganhon print terre.)。モンテーニュ。自然人。ルソー。フランス革命からロマン主義へ、ポリシェヴィキ革命へ、シュルレアリスム革命へ、カイザーリンクの技術的な野蠻人へ。私たちは歩いていく。」“Filiação. O contato com o Brasil Caraíba. Où Villeganhon print terre. Montaigne. O homem natural. Rousseau. Darevolução Francesa ao Romantismo, à Revolução Bolchevista, à Revolução surrealista e ao bárbaro tecnizado de Keyserling. Caminhamos.” (“Manifesto Antropófago”, pp. 68-69. 12)

19 Andrade (1991), p. 45. バリーによる英訳の訳注を参照。

20 Oswald de Andrade, “A Crise da Filosofia Messiânica”, 1950, em *A Utopia Antropofágica*, obras completas, 4ª edição, 2011, pp. 138-215.

21 「だが、私たちは決して私たちのなかに論理が生まれることを認めなかった。」“Mas nunca admitimos o nascimento da lógica entre nós.” (“Manifesto Antropófago”, p. 69. 14)

22 「私たちは神話の世界にのみ注意を払うべき。」“Só podemos atender ao mundo orecular.” (“Manifesto Antropófago”, p. 69. 17)

- 23 レヴィ・ブリュル『未開社会の思惟』上、山田吉彦訳、岩波書店、一九五三年、九七頁。レヴィ・ブリュルによれば、前論理的とは反論理的でも無論理的でもない。
- 24 Oswald de Andrade, “A Crise da Filosofia Messiânica”, 1950.
- 25 査読者より、この「具体主義者」と同時代のヨーロッパの前衛芸術運動「アール・コンクレ」(Art Concret)との関連を指摘いただいた。直接的な関わりについてはいまだ確認できていないものの、一九二〇年代のアンドラーヂがヨーロッパの前衛芸術家たちと積極的な交流をもっていたことを考えれば、両者が知的背景を共有していることは十分あり得る。示唆をいただいたことに、記して感謝申し上げます。
- 26 自身の英訳においてレスリー・バリーはより具体的に、「道具」(os instrumentos)を星のしるしを読む道具である「六分儀」(sextants)と訳している。
- 27 「植物的なエリートに反対して。土地との交感において。」“Contra as elites vegetais. Em comunicação com o solo.” (“Manifesto Antropófago”, p. 70. 23)
- 28 Stephanie D’Alessandro, “A Negra, Abaporu, and Tarsila’s Anthropophagy”, in *Tarsila do Amaral: Inventing Modern Art in Brazil* (exh. cat.), Chicago, Art Institute of Chicago, New York, The Museum of Modern Art, 2018, p. 41.
- 29 例えば、古屋 (2001)、後藤 (2006) による批判がある。
- 30 晩年の論文「メシマ哲学の危機」での議論を参照。Oswald de Andrade, “A Crise da Filosofia Messiânica”, 1950.

参考文献

- 後藤雄介 (2005) 「喰うか喰われるか?」(前編)——ラテンアメリカをめぐる「喰人」表象の変遷に関する一考察——、『学術研究 (外国語・外国文学編)』所収、早稲田大学教育学部、五三号、二二一―二三三頁。
- (2006) 「喰うか喰われるか?」(後編)——ラテンアメリカをめぐる「喰人」表象の変遷に関する一考察——、『学術研究 (外国語・外国文学編)』所収、早稲田大学教育学部、五四号、二二一―二三二頁。
- 都留ドウヴォー恵美里 (2017) 『日系ブラジル人芸術と〈食人〉の思想・創造を共生の軌跡を追う』三元社。
- 古谷嘉章 (2001) 『異種混種の近代と人類学』、人文書院。
- レヴィ・ブリュル (1953) 『未開社会の思惟』上/下、山田吉彦訳、岩波書店。
- 『ネオ・トロピカリア：ブラジルの創造力』(展覧会カタログ)、東京都現代美術館、広島市現代美術館、二〇〇八年。
- 『ブラジル：ボディ・ノスタルジア』(展覧会カタログ)、東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、二〇一四年。
- Andrade, Oswald de (1928), “Manifesto Antropófago”, em *A Utopia Antropofágica*, obras completas, 4ª edição, São Paulo, Editora Globo, 2011, pp. 67-74.
- (1940-1950), “Um Aspecto Antropofágico da Cultura Brasileira: O Homem Cordial”, em *Estética e Policia*, obras completas, 2ª edição, São Paulo, Editora Globo, 2011, pp. 450-453.
- (1950), “A Crise da Filosofia Messianica”, em *A Utopia Antropofágica*, obras completas, 4ª edição, 2011, pp. 138-215.
- (1954), “Do Órfico e Mais Cogitações”, em *Estética e Policia*, obras completas, 2ª edição, São Paulo, Editora Globo, 2011, pp. 454-460.
- (1991). Leslie Bary, trans., “Cannibalist Manifesto”, *Latin American Literary Review*, vol. 19, no. 38,

- Pittsburgh, Latin American Literary Review, pp. 38-47.
- Azevedo, Beatriz (2016), *Antropofagia: Palimpsesto Selvagem*, São Paulo, Cosac Naify.
- Bary, Leslie (1991), "The Tropical Modernist as Literary Cannibal: Cultural Identity in Oswald de Andrade", *Chasqui*, vol.20, no.2, Chasqui: revista de literatura latinoamericana, pp.10-19.
- D'Alessandro, Stephanie (2018), "A Negra, Abaporu, and Tarsila's Anthropophagy", in *Tarsila do Amaral: Inventing Modern Art in Brazil* (exh. cat.), Chicago, Art Institute of Chicago, New York, The Museum of Modern Art, pp. 38-55.
- Jáuregui, Carlos (2012), "Anthropophagy", Robert McKee Irwin and Mónica Szurmuk (eds.), *Dictionary of Latin American Cultural Studies*, Gainesville, University Press of Florida, pp.22-28.
- Lagnado, Lisette and Pablo Lafuente (eds.) (2015), *Cultural Anthropophagy: The 24th Bienal de São Paulo*, London, Afterall.